

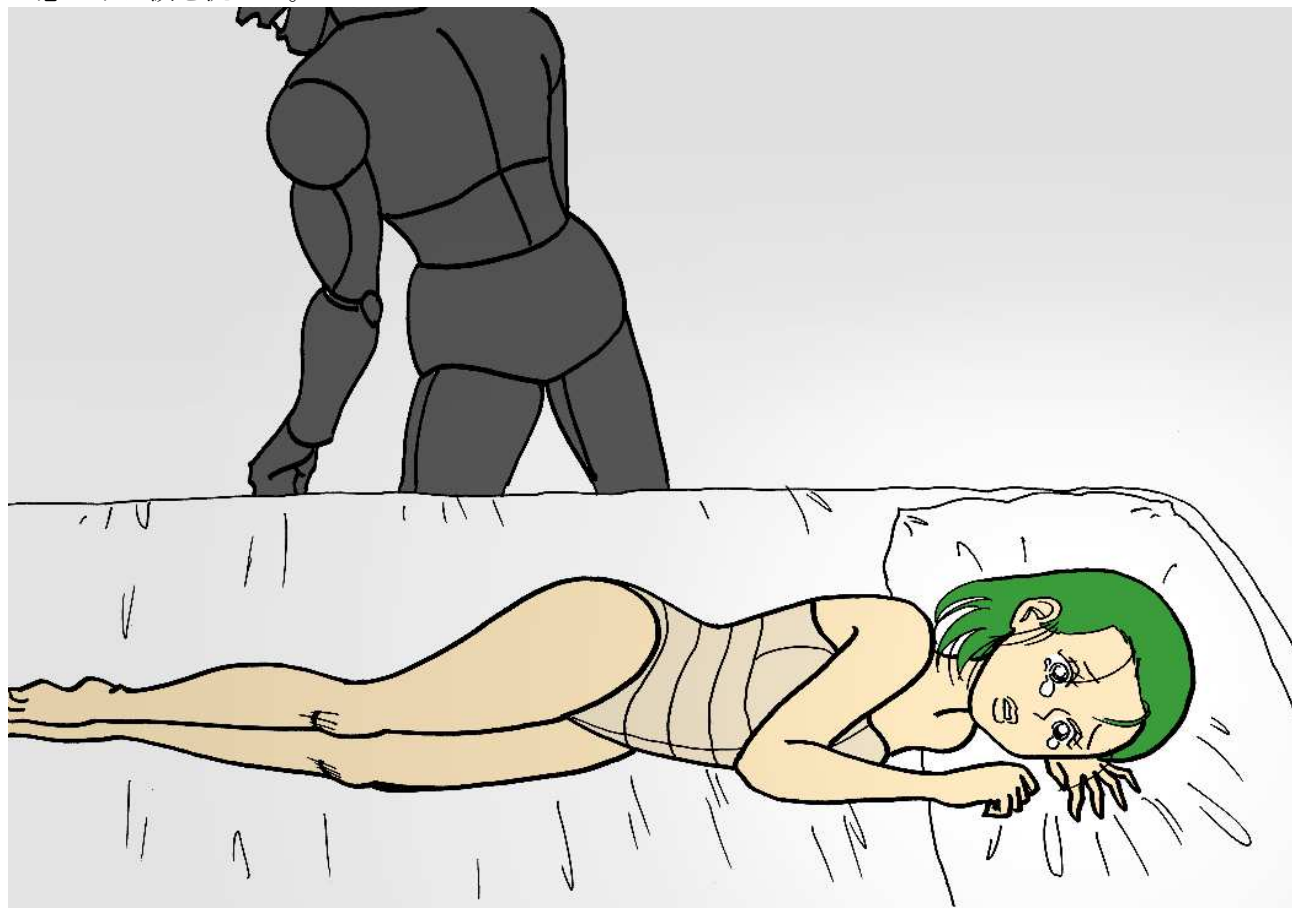
「サッチー とらみ と みみな —— 終わりと始まり ——」

「よかったぜ、ラミビーナ」

薄暗い部屋の中、男がベッドから離れた。肉体を作り変えられた改造人間……人工皮膚の下の人工筋肉がまるでロボットのようにゴツゴツしている。

「次もまた頼むな」

そう言って男は出て行った。後に残されたラミビーナ2号・林みみなのはベッドに横たわったまま悲しげに涙を流した。



みみなのは泣いてばかりいる。うちに帰りたいと泣いてばかりいる。改造犬バンダにしがみついてさめざめと涙を流し続ける。

「泣クナ、ミミナ……」



バンダは人語を話す機能を付与されている。犬の特質である発達した嗅覚と聴覚によって得られる情報を人間に言葉で伝えるためだ。改造されて胴体部分は改造人間たちと同様に人工物で覆われて無機的な外見となっている。

「わたし別に、えっち自体は嫌いじゃないんだ」

バンダの硬質な筐体に両腕を回したままみみなは呟いた。

「でも、好きでもない男の相手をさせられるのはやだ。絶対にやだよ」

そう言ってみみはまた泣いた。

「わたしはえっち自体嫌いだよ」

ラミビーナ1号・本中楽美（らみ）が仏頂面でぼそつと言った。

「あんなもん、痛いばっかでちっともよくねーじゃん」

「らみちゃん痛がりだもんね」

らみとみみは実の姉妹のように仲が良い。

「改造されちゃってもう痛みなんかないけどさ、でもやっぱり気持ちわりーよな」

「好きな男ができれば変わるかもしれないよ」

「ここにそんな男いるかよ」

彼らが今いるのは、テロスの基地内部にある狭くて殺風景ならみの個室だった。みみなの部屋も全く同じ無味乾燥な代物だ。彼女達の居住エリアは特には出入りを制限されておらず、改造犬も入って来られるため、せめて二人と一匹が固まっていれば多少は気が紛れるかと思って集まっているが、大して変わり映えしない。



「そんなに嫌なら、もう脱走しかないな」

バンダが言った。急に流暢な喋り方になった。

「脱走なんて無理だよ」

らみは端から諦めている。

「大丈夫さ。バンダが手引きする。テロスのコンピューター、『Mシステム』が協力してくれるんだ」

改造犬は澄んだ眼差しで、すっと腰を上げた。

「ついておいで。即実行だ」

「えっ？ えっ？ 怖いよー」

みみなはうろたえた。

「案ずることはない。『Mシステム』が扉を開けてくれるから、後は勝手に出て行くだけだ」

「警備の奴らはどうすんだよ？」

バンダの後ろを歩きながららみが尋ねた。渋るみみなを抱き抱えて引っ張る。

「それも『Mシステム』が追い払ってくれる」



バンダは『オペレーション・ルーム』と表示された部屋へ二人を導いた。

「二人とも台の上に横になり給え。体内の自爆装置や毒素発生装置を除去する。二人同時にやるからさほど時間はかからない」

言われた通りにしたらみとみみなのところへロボットアームが伸びてきて何やら操作を始めた。身体は麻痺したように動かなくなったが、首から上は自由が利くため、開かれた胴体の中身を覗くことができた。

「うっげー！ なんじゃこりゃー！」

思わず叫ぶらみ。しばらく目まぐるしく作業を続けたアームが蓋を閉めると、数分後には身動きできるようになった。

「さあ、服を着て。逃走用の資金も用意した」

テーブルがスライドしてきた。洋服とバッグが載せられている。

「基地を抜け出したら、『諫波探偵社』に駆け込みなさい。君たちを助けてくれる。バッグの中に携帯が入ってるから、基地の外へ出たら電話しなさい。番号は登録済みだし、予備のバッテリーもある」

「おいおい！ 札東がテンコ盛りじゃねえか！」

手早く身支度したらみは、バッグを開けた途端に仰け反った。

「落としたり盗られたりしないように、バッグはらみがストラップを纏掛けるにして運べ。携帯はみみなが持って、君が探偵社に連絡するんだ」

バンダが事細かに指示を出す。

「『Mシステム』の計画は完璧だ。指示通りに行動すれば全てうまく行くから何の心配も要らない」

何もかもがスムーズだった。携帯の地図を見ながら『諫波探偵社』を目指したので全く迷わなかった。

「先程電話した本中楽美と林みみなです」

インターホンで名乗ると速やかにドアが開いた。二人を出迎えたのはポニーテールの若い女性だった。

「わたくし、当探偵社の探偵長を務めます、山下佐知恵と申します」

彼女は二人に名刺を渡した。

「探偵長って、偉いのかい？ まだ二十歳くらいだろ？」

らみが相手の若々しい顔をまじまじと見つめた。

「えーっと……ホステスさんみたいに十八歳で通してまーす」

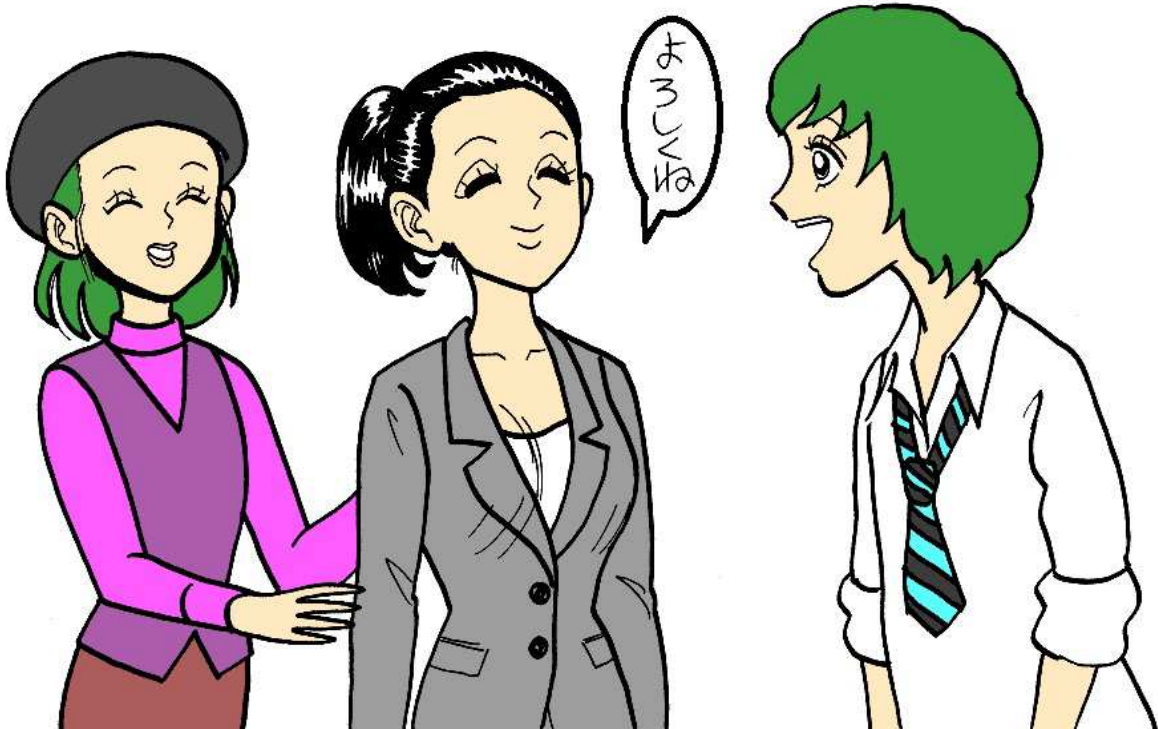
山下佐知恵は悪戯っぽく笑いながらぺろっと舌を出した。

「あっはっは。わたしらもこれからはその手で行こう」

らみとみみなも声を立てて笑った。

「まあ、肩書きなんてあってないようなものだから……とにかくよろしくね」

応接室で一連の遣り取りをした後、三人で探偵社を出た時にはもうすっかり打ち解けて、彼らは友達同士になっていた。



逃亡者には新しい名前が必要だ。身分証明書等は偽造する。裏社会に通じた諫波探偵社にとってはさほど難しい仕事ではないが、それなりに時間はかかる。住居も含めた諸々の手配が完了するまでの間の潜伏場所として、佐知恵は二人をホテルに匿うことにした。

「なんだよ、サッチー、もう帰っちゃうのかよ？」

らみはいつも男言葉だ。

「二人だけだと心細いよー。一緒にいてよ。今夜は泊まって行って、ね？」

みみなのは人懐っこく両手で佐知恵の腕を抱え込んだ。

「そうね……わたしじゃ護衛にはならないけど、男と同室じゃ具合悪いもんね」

佐知恵は頷いた。

彼らの食事には佐知恵もいささか驚いた。改造人間と言えど生体部分への栄養補給は欠かせないが、消化器系統の臓器をかなり取り除かれてしまったため、食材を全てペースト状に練り合わせなくてはならないのだ。材料自体は市販されているもので間に合うが、調理過程がなかなか大変だ。ホテルに来る途中で買った食材と調理器具を部屋のテーブルに広げ、三人がかりでみじん切りにしたりすり潰したり攪拌したり、きゃいきゃいと大騒ぎだった。

「思いのほかイケる……」

出来上がったものをスプーンで掬って味見した佐知恵は目を丸くした。そうこうしているうちに佐知恵の分の夕食がルームサービスで届けられた。スープやデザートなど、らみとみみなも食べられるものは三人で分け合った。

食事の後は入浴だ。佐知恵は目のやり場に困った。二人の身体は、胴体部分がまるでロボットみたいで、女性の肉体にあるべきものがなかった。それでもらみとみみなのは屈託がなかった。三人で背中を流し合い、浴槽に並んで浸かった。

「サッチーの肌、メチャメチャきれいだな」

「ほんと、赤ちゃんみたい」

「ひえええっ！ そんなとこ触らないでっ！」



二人は持参したパジャマを着用した。
「ねえ、浴衣着ない？」
かつて着物や浴衣が普段着だった時代から生きている佐知恵は提案した。
「着方を教えてあげるから」
「やだー、面倒臭いー」
みみなが唇を尖らせた。
「それに、寝乱れた姿にムラムラ欲情しちゃったりしたらヤバイわよ、女同士でさあ」
みみなが意外と語彙が豊富だ。
『寝乱れた』だなんて、なかなか文学的な言い回しじゃないの」
感心して佐知恵が言った。
「みみながナメんなよ、サッチー。まったりした性格と喋り方のせいで頭のトロイ女だって勘違いするヤツがいるけど、コイツは本をいっぱい読んでて難しい言葉も結構知ってるんだぜ」
らみは得意げに言った。
「わたし、作家志望だったんだー」
みみなが照れ笑いを浮かべた。
「お前もこれ着ろよ、サッチー」
らみがパジャマを押し付けた。二人と同じ柄のパジャマだ。三人とも背格好が同じなのでサイズは全く問題ない。
「失敗したなー。シマシマで囚人服みたいだね」
みみながけらけら笑った。



大きなダブルベッドに三人は潜り込んだ。手を繋いでいてくれなければ眠れないと、ぐずるみみなを両側かららみと佐知恵が手を握ってやると、あっけなくみみなは寝息を立て始めた。

「もう寝ちゃった」

佐知恵は微笑んだ。

「わたしはコイツのことがさ……」

らみは空いている手でみみなの額を撫でた。

「可愛くて可愛くて仕方がねえんだ。だから、みみなを泣かす奴は絶対に許さねえ……！」

口元をきゅっと引き締めたらみは、すぐに表情を緩めて佐知恵を見た。

「それにしても、サッチー、お前もすっかりコイツに懐かれちゃったな」

「ふふふ……素直ないい子ね」

「わたしにもしものことがあったら、みみなのこと頼むぜ、サッチー」

「ちょっと、縁起でもないこと言わないでよ」

だが、らみの危惧は現実のものとなってしまったのだ。